

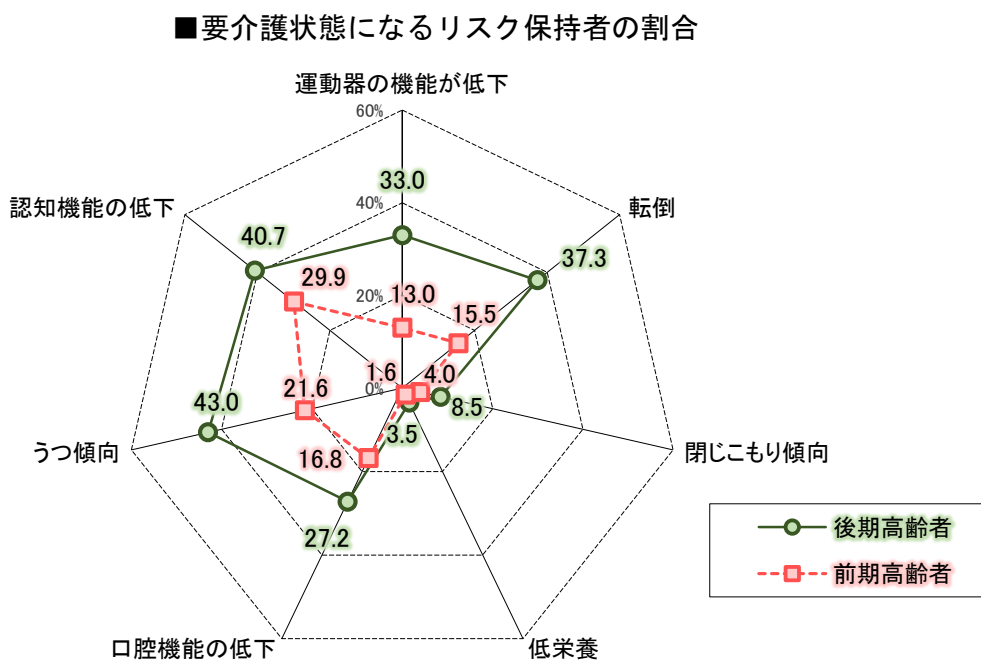
2. 高齢者の日常生活と社会参加の状況

(平成27年、28年実施日常生活圏域ニーズ調査結果より抜粋)

(1) 高齢者の日常生活について

① 要介護状態になるリスク保持者の割合

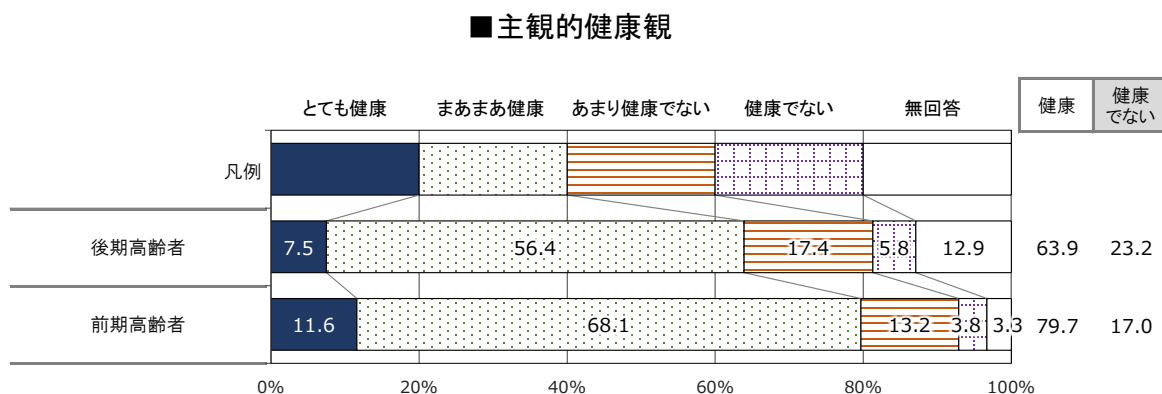
調査結果から算出される要介護状態になるリスク保持者(※)の割合は、後期高齢者の方が前期高齢者よりも高くなっています。なお、後期高齢者において要介護状態になるリスク保持者の割合が最も高いのは、うつ傾向にある人(43.0%)で、以下、認知機能の低下が疑われる人(40.7%)、転倒リスクのある人(37.3%)、運動器の機能が低下している人(33.0%)、口腔機能の低下が疑われる人(27.2%)と続いています。なお、閉じこもり傾向のある人(8.5%)、低栄養が疑われる人(3.5%)は低い状況となっています。



※リスク保持者…危険性がある人

②主観的健康観

現在の健康状態については、自分自身を『健康』と評価している人の方が多く、後期高齢者は63.9%、前期高齢者は79.7%となっています。生活機能低下者(※)に限定した場合も、『健康』の方が『健康でない』よりも上回っているものの、後期高齢者、前期高齢者のいずれも『健康ではない』が3割以上に高まっており、介護・介助の必要な身体状態が自身の健康観に影響している状況がみられます。



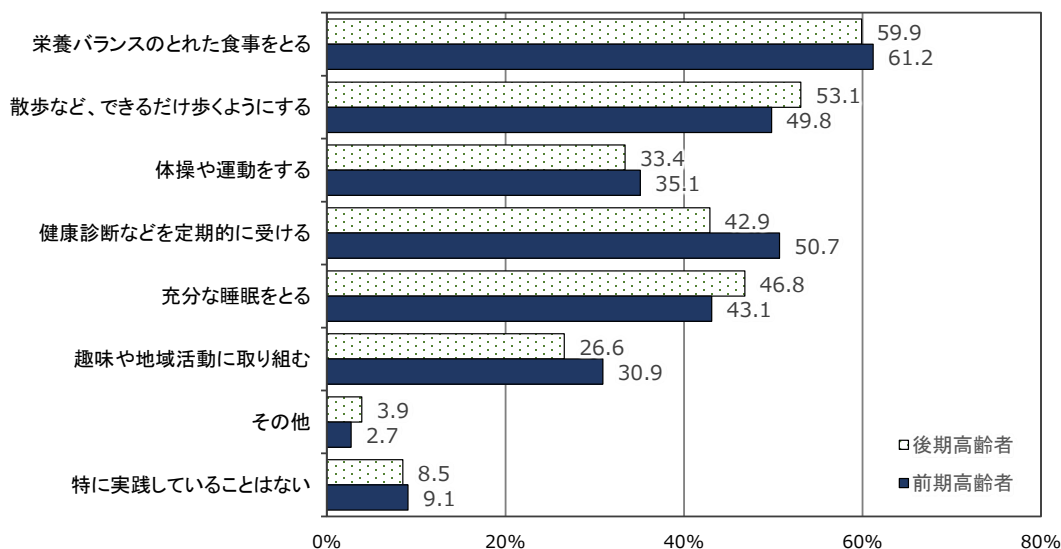
注：『健康』は、「とても健康」と「まあまあ健康」を合わせた割合

③介護予防のために実践していること

介護予防のために実践していることについては、後期高齢者、前期高齢者のいずれも「栄養バランスのとれた食事をする」の割合が最も高く、この他に「散歩など、できるだけ歩くようにする」、「十分な睡眠をとる」、「健康診断などを定期的に受ける」といった項目が高くなっていますが、「健康診断などを定期的に受ける」人の割合は前期高齢者の方が後期高齢者よりも高くなっています。性・年齢別にみると、「栄養バランスのとれた食事をする」が高くなっているものの、割合は女性の方が男性よりも上回っており、女性の方が意識は高いと考えられます。この他、男女いずれも75～79歳は「趣味や地域活動に取り組む」の割合が、他の年代よりも高くなっています。なお、日常生活圏域別にみると、後期高齢者の二丈圏域は「健康診断などを定期的に受ける」(38.6%)が他の圏域に比べて割合が低くなっているほか、「趣味や地域活動に取り組む」(23.2%)も他の圏域よりも割合が下回っています。

※生活機能低下者…将来、介護が必要となるおそれの高い状態にあると判断される高齢者

■介護予防のために実践していること

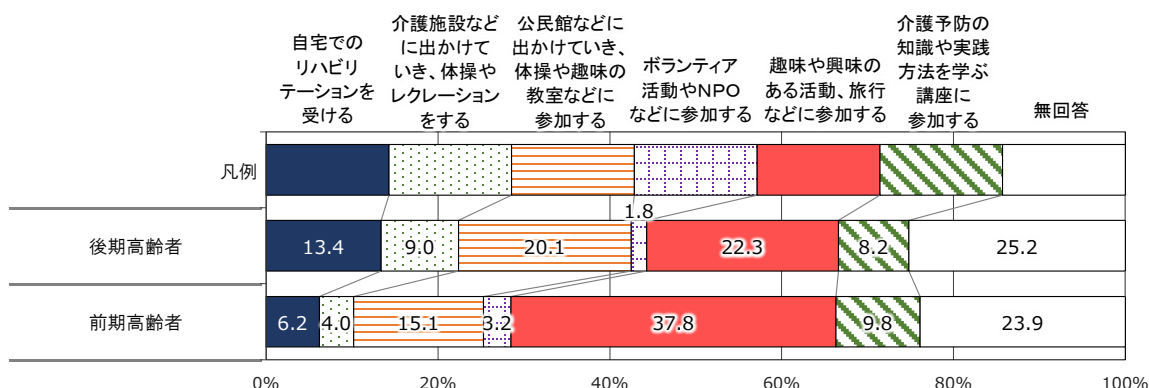


④介護予防への取り組みへの参加意向

介護予防への取り組みへの参加意向については、後期高齢者は、「趣味や興味のある活動、旅行などに参加する」(22.3%)、次いで「公民館などに出かけていき、体操や趣味の教室などに参加する」(20.1%)、「自宅でのリハビリテーションを受ける」(13.4%)の順となっています。

前期高齢者は、「趣味や興味のある活動、旅行などに参加する」(37.8%)が最も多く、次いで「公民館などに出かけていき、体操や趣味の教室などに参加する」(15.1%)、「介護予防の知識や実践方法を学ぶ講座に参加する」(9.8%)となっています。

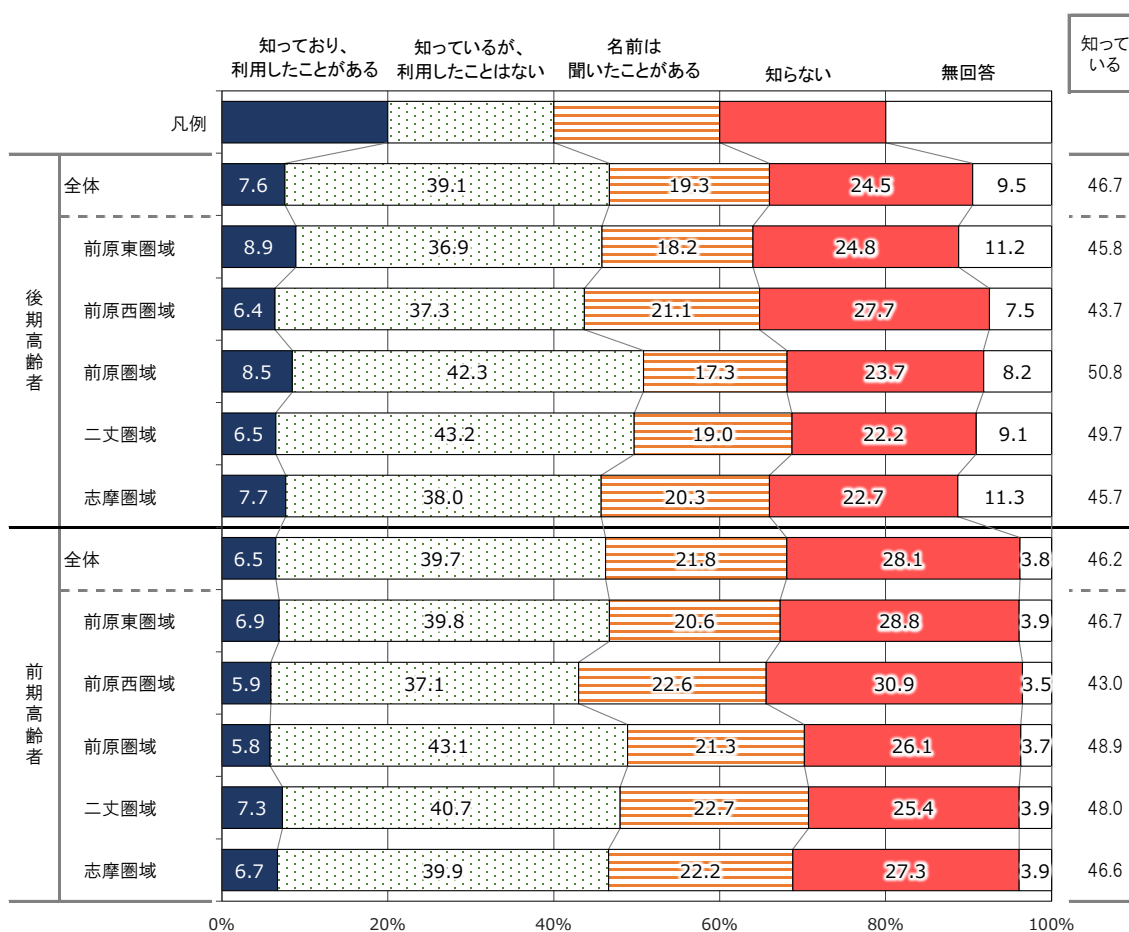
■介護予防への取り組みへの参加意向



⑤地域包括支援センターの認知度

地域包括支援センターについては、後期高齢者、前期高齢者のいずれも「知っており、利用したことがある」人の割合は1割未満で、さらに「知っているが、利用したことがない」を合わせた『知っている』人の割合は5割を下回っています。日常生活圏域別にみると、『知っている』人の割合が最も高いのは後期高齢者の前原圏域の50.8%で、最も低いのは前期高齢者の前原西圏域の43.0%です。ほとんどの圏域が『知っている』人は5割を下回っており、地域包括支援センターの認知度は十分とは言えません。

■地域包括支援センターの認知度



注：『知っている』は「知っており、利用したことがある」、「知っているが、利用したことはない」を合わせた割合

(2) 社会参加の状況

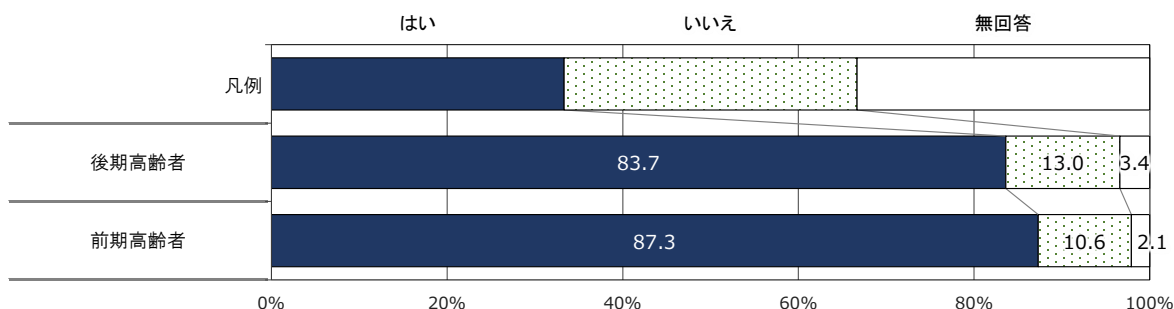
① 高齢者の生きがいづくり

“生きがいはありますか”という問いに対して「はい」と答えた人の割合は後期高齢者、前期高齢者のいずれも8割を超えています。

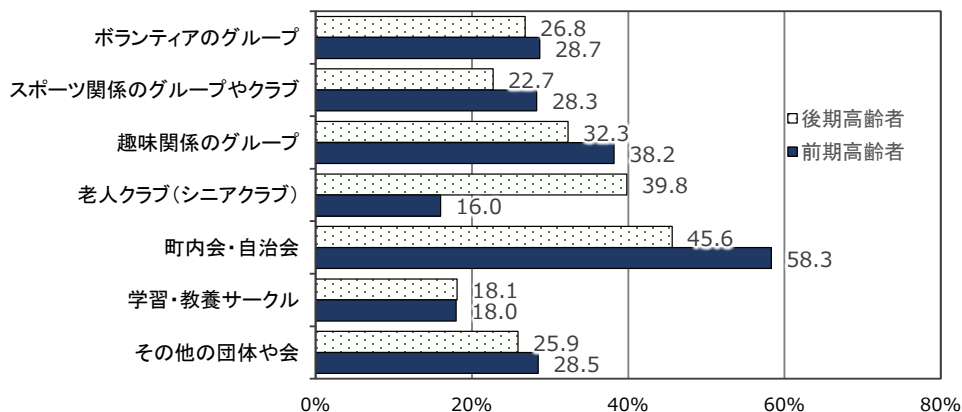
社会参加（対外活動）の状況についてみると、後期高齢者のうち参加している割合が最も高いのは「町内会・自治会」（45.6%）で、以下、「老人クラブ（シニアクラブ）」（39.8%）、「趣味関係のグループ」（32.3%）と続いています。前期高齢者についても、最も高いのは「町内会・自治会」（58.3%）ですが、次いで高いのは「趣味関係のグループ」（38.2%）の順となっています。

社会参加活動や仕事への参加状況についてみると、参加している割合が最も高いのは後期高齢者、前期高齢者のいずれも「地域の生活環境の改善（美化）活動」（後期高齢者 43.3%、前期高齢者 58.8%）となっていますが、男女とも年齢が上がるにつれて参加している割合は減少しています。

■ 生きがいの有無



■ 社会参加（対外活動）の状況（参加している割合）

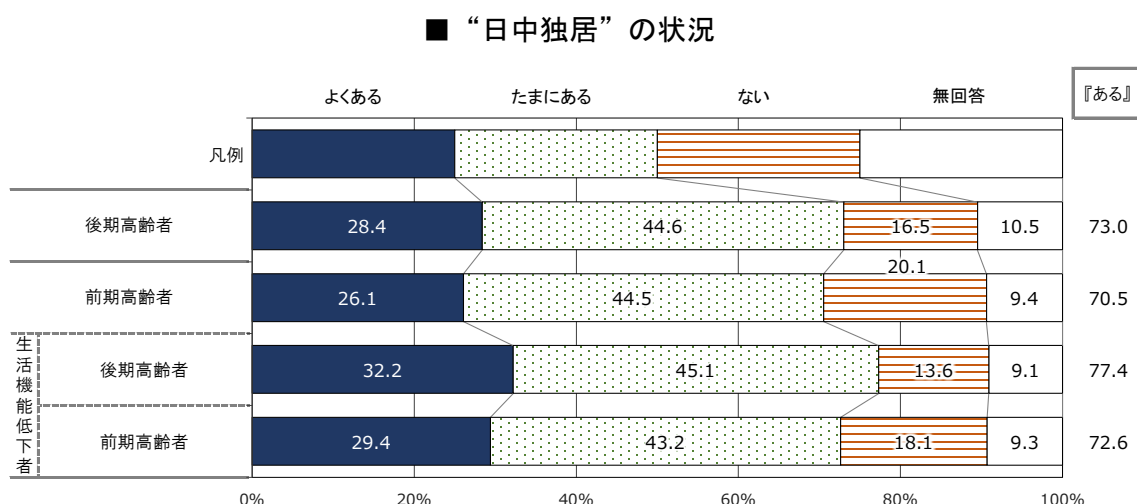


注：参加している割合は「週4回以上」、「週2～3回」、「週1回」、「月1～3回」、「年に数回」を合わせた割合

②高齢者にやさしいまちづくり

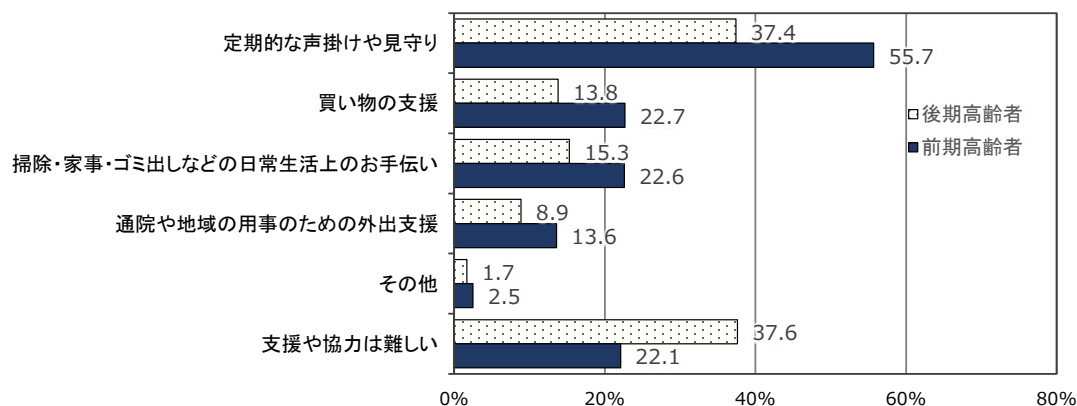
いわゆる“日中独居”の状況についてきいたところ、日中、一人になることが『ある』人の割合は前期高齢者が73.0%、後期高齢者は70.5%と、いずれも7割に達しています。生活機能低下者に限定してみると、後期高齢者、前期高齢者のいずれも『ある』の割合は全体よりも高まっています。

地域で支援や協力ができることをきいたところ、後期高齢者、前期高齢者のいずれも「定期的な声掛けや見守り」の割合が最も高くなっているものの、前期高齢者（55.7%）の方が後期高齢者（37.4%）よりも高く男女とも年齢が上がるにつれて割合は減少しています。なお、「支援や協力は難しい」と答えた人は男女とも年齢が上がるにつれて割合が増加しています。



注：『ある』人の割合は「よくある」、「たまにある」を合わせた割合

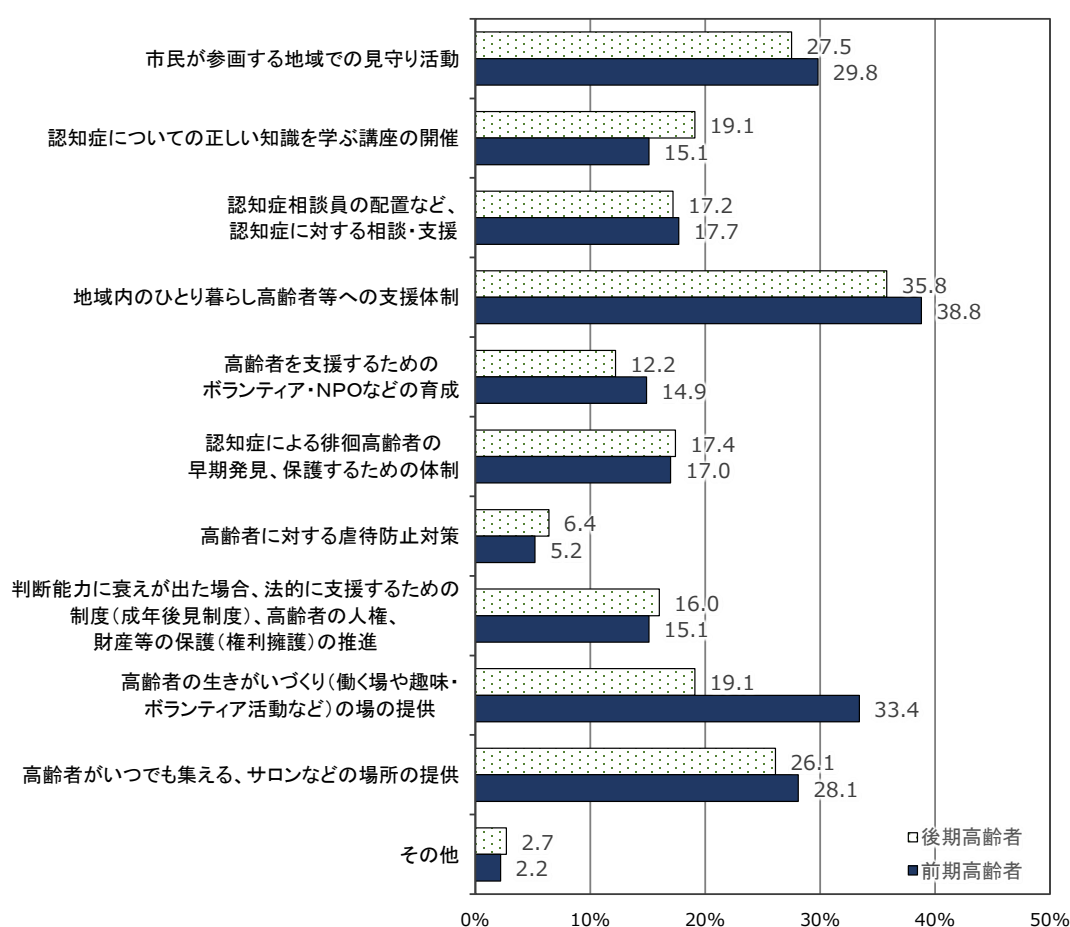
■地域で支援や協力ができること



③高齡化に対応するために必要な活動・体制

高齡化に対応するために必要な活動・体制についてきいたところ、最も割合が高いのは後期高齡者、前期高齡者のいずれも「地域内のひとり暮らし高齡者等への支援体制」で、以下、「市民が参画する地域での見守り活動」や「高齡者がいつでも集える、サロンなどの場所の提供」などが続きますが、前期高齡者は「高齡者の生きがいがづくり（働く場や趣味・ボランティア活動など）の場の提供」（33.4%）が高くなっています。

■高齡化に対応するために必要な活動・体制の充実



④介護が必要になったときに希望する生活形態

介護が必要になったときに希望する生活形態についてきいたところ、最も割合が高いのは後期高齢者、前期高齢者のいずれも「自宅で家族の介護と外部の介護サービスを組み合わせて利用したい」で、生活機能低下者に限定した場合も、全体と同様の傾向となっています。

■介護が必要になったときに希望する生活形態

